

政策決定のための効用計測の可能性についての考察

経済学部 2 年

大日方究

0. はじめに

私が今回効用計測の可能性について考察したいと考えたのは、昨年度教養の授業で「チケット転売問題の是非について」というテーマでの論文指導科目がきっかけである。様々な観点からチケット転売問題に関して考察していく中である時、功利主義的な観点からの考察が必要となった。その時功利主義的観点からチケット転売の是非を語るには、転売によって利益を得る者と損失を被る者の効用の大きさを比べる必要があるが、それが大変難しいということに気が付いた。しかしステークホルダー間の効用の大きさを計測し、比較することができなければ、為政者はいかにして政策決定を行えば合理的に決定できるのか。今回の期末レポートについては主に J.S ミルの功利主義論をベースに効用の大きさを計測し、政策決定に活用する手法について考える。

1. 個人間の効用比較可能性

政策決定のための効用計測の可能性を検討するためまずは個々人間での効用の大きさが比べられないか検討する。社会は個々人の集団であるから個々人の効用が計測可能ならそれらを足し合わせ、比較することで社会として最も効用の増大が見込める選択肢を取ることができる。

a. 個人の感じる効用とは

個人間の効用比較可能性について考える前に、我々の感じる効用について整理する。

J.S ミル以前の功利主義においては、効用は快樂の「量」で計測可能な性質をもつものであり、それこそが功利主義の本質であった。またある事象に対して得られる快樂の量は個々人間で差がなく、皆同じであった。例えば北海道大学合格に対する快樂が 50 だとすればこれは世界中の人間にとって同量の快樂であった。量で快樂が計測可能であれば比較が大変容易である。例えば東京大学合格の快樂が 100 だとすれば¹これは北海道大学合格に合格するより大きいことが大変わかりやすい。

しかし、J.S ミルはこの定量的な効用計測に対して疑問を呈し、自らの理論では効用の「質」の概念を採用した。その主張を明快に示した一節は以下の

¹ 北海道大学合格の快樂より大きいことは自明と考える

文である。

「満足した豚より、不満足な人間である方がよく、満足な馬鹿より、不満足なソクラテスの方が良い。」

これは「高級な快樂」と「低級な快樂」の二つからそれぞれ質の異なる効用が得られるという立場の表明である。それまでの功利主義では効用を量で単純に数値化していたのに対し、J.S ミルは個々人の体験、感性を基にその質の違いに目を向け、単純に数値化することを批判したのである。先ほどの例を取れば、常に東京大学合格の快樂が北海道大学合格のそれよりも大きかったが、これは個々人の感性によっては二つの快樂の大きさの間にどの程度の差が生まれるのか、またどちらの快樂の方が大きいのか異なるということである。J.S ミルがこれらの主張を短くまとめた言葉が以下の文である。

「苦痛にせよ、快樂にせよ、同質ではないまして苦痛と快樂とは常に異質的である。」

これは我々の快樂に対する実感には近いように思われるが、功利主義上の大きな方針転換である。J.S ミル以前の功利主義の利点はそれまで曖昧であった効用を客観的かつ簡素に数値化し比較することができるようになったことであったが、J.S ミルの方針転換はこの利点の大部分を失ってしまった形になる。それまではこの事象から得られる快樂の量は容易に数値化できていたが、J.S ミルの理論ではある事象から得られる快樂を数値化することは大変困難になってしまった。しかしJ.S ミルは効用の大きさの計測方法自体は明確に示している。次節ではその内容について考える。

b. 効用を計測するための条件

J.S ミルによれば二つの快樂のどちらが優れているかを計測するには以下のようにする必要がある。

「二つの快樂のうち、両方を経験した人が全部、またはほぼ全部、道徳的義務感とは関係なく決然と選ぶ方が、より望ましい快樂である。」

このように両方の知識を持ち、その快樂を比べることのできる人間を「有資格者」といい、その快樂の価値の最終的な決定法については以下のように述べている。

「二つの快樂のうち、どちらが持つに値するか、……という問題については、両方の知識を持つ有資格者たちの判断が、また判断が食い違う時にはその過半数の判断が、最終的なものと認められなければならない。」

つまり、二つ以上のある事象から得られる快樂の大きさはそれらを両方経験した人間による直接的な比較によって計測可能になるということである。これは従来の功利主義論で唱えられた功利計算に対する諦めのように映るがこれについてJ.S ミルは以下のように述べている。

「快樂の量の問題についてさえ、これ以外に訴えるべき法廷がないのだから、質に関する彼らの判断を受け入れるのをためらう必要はさらに少ないのである。二つ苦痛のどちらが最も苛烈か、二つの快樂のうちどちらが最も強烈かを決めるのに、両方と見知っている人々に意思表示のほかに、どんな手段があるだろうか。」

J.S ミルは功利主義論の生みの親たるベンサムとは異なり、人間の経験を快樂と苦痛を共通項としない、個人的な体験であるととらえたがゆえにこのような原始功利主義としては不徹底な功利計算を取り入れざるを得なかったのではないだろうか。

では有資格者が快樂を判断する材料は何であろうか。J.S ミルによればそれは「品位の感覺」である。品位の感覺とは劣等者(低級な快樂しか感じるができない者)に身を落とすたくないという感覺であり、それは高級な能力と、厳密にはではないが、比例し、幸福の本質的部分をなしている。²つまり教育や出生などを通して獲得した高貴さを失わないため、より高級な快樂を選択するというのが品位の感覺である。つまり質の高い快樂とは高い品位の感覺を持つ有資格者が選択しうる快樂のことである。そして質の高い快樂はより大きな効用を生み出す。

しかし品位の感覺を持たない有資格者にとっては質の高い快樂は意味をなさない。なぜならその質の高さを理解する感覺が「品位の感覺」であるからだ。また当然ではあるが高い品位の感覺を有する有資格者にとっては低級な快樂では物足りないのである。

以上より効用を計測する条件は、①比較する2つ以上の快樂について経験したことのある複数の有資格者②自らの品位の感覺に従って③好ましいものを選び、最も多く選ばれた快樂が質の高いものであるとまとめることができる。

c. 個人間の効用は比較可能か

最後に個人間の効用が比較可能かどうかについて検討する。J.S ミルの理論に従うと効用の計測は個々人単位で定量的に行うことが不可能であることは前述したとおりである。つまり個人間の効用の大きさを直接比較することは不可能である。ベンサムが提唱したように個人の受け取る効用を定量的に数値化することができれば容易に比較可能であるがそれは前述のとおり J.S ミルの理論では否定されている。このように個人間の効用を比較することができないことをイギリスの経済学者ウィックステッドは以下のように表現した。

「相異なる精神(minds)のうちにある欲望・欲求は、たとえ一個同一のものに

² 『自己陶冶と公的討論 J.S ミルが描いた市民社会』 檜本直樹著より

対するものであっても、相互に比べて測ること、つまり共通の物差し (measure) に還元することはできない」

2. 総体としての効用の計測手法

個々人の得る効用を比較することによって合理的な政策決定に役立てようという着想の下考察を進めてきたが、それは困難であることが分かった。しかし市民の効用を総体として計測する手法にはまだ利用する余地が残されている可能性に思い至ったので以下に記述する。

私は政策決定のため、その政策を採ったときの個々人が受け取る効用と失う効用を比較しその政策の合理性を分析すれば適切な政策決定が可能だと考えていたが、個人間の効用比較が不可能であることが前述のとおり明らかになった。

しかし J.S ミルの効用計測の理論を社会全体としての効用計測に応用できないかと考えた。その手法は以下のとおりである。

- ① 十分な数の市民を無作為に抽出する。
- ② 彼らに対してある政策の是非を問う。その際政策導入前後で受け取ったり失ったりする快樂について説明する。
- ③ 市民による是非の投票を行う。

これは政策によって発生したり失われる快樂を直接計測する発想である。まず、より優れた快樂を計測するためには、どちらの快樂も経験したことのある有資格者が必要であるが、この点は一定の注意は必要であるが無視してもよいと考える。なぜなら政策によって発生したい失われる快樂は一般的なものである場合が多いからだ。例えば年金を廃止するという政策の是非について検討する場合、無作為抽出した市民の中に年金受給者は半分も含まれていないだろうが、無収入または低収入で生活しなければならない苦しみは一般的なものである。つまり多くの人間が有資格者たりえる。

また様々な品位の感覚を持った人間により効用計測が行われることになるがこれも問題がないと考える。理由は、その結果が本質的に正しいかは留保の余地があるが社会全体の効用計測の結果としては正しいといえるからだ。例えば大麻を合法化するという政策の是非を検討したとして、恐らく高級な品位の感覚を持つ者は反対するが、全体としては賛成票が多い可能性がある。この時大麻を合法化することの成否は別としても社会全体としての効用の収支はプラスになっていると考えてよいと考える。

3. おわりに

政策決定のために個人間の効用を比較できないかという着想から始まった今回のレポートであったが、関連書籍を読み進めていく中で予想していなかつ

た結論に辿り着き驚いている。最後に自分のアイデアという形で政策決定のための効用計測の手法についてまとめてみたが、実際に運用されている手法があるのであればそれがどんなものなのか気になるので調べてみたいと思った。

今回効用について考えたが、準備不足であったこともあり十分功利主義の原理を理解しているとは言えない状態でレポートを作成してしまった。今後どのような専攻に移っていくのかは不明であるが、社会を生きる一人の人間として功利主義的な発想は必要であると思うのできちんと機会を作り正しい理解をしたいと思う。

4. 参考文献

『功利主義論集』J.S ミル(訳：川奈雄一郎、山本圭一郎)，京都大学学術出版会,2010/12/5

『これからの [正義] の話をしよう』マイケルサンデル(訳：鬼澤忍),早川書房,2011/11/25

『それをお金で買いますか 市場主義の限界』マイケルサンデル(訳：鬼澤忍),早川書房,2014/11/15

『自己陶冶と公的討論 J.S ミルが描いた市民社会』樫本直樹,大阪大学出版会,2018/11/30

『個人間効用比較の問題をめぐって』川俣邦雄,慶應時塾経済学会,三田学会雑誌 84 巻特別号(1991.9),p.24-31